



森林ふれあい情報

平成27年12月
第37号

林野庁中部森林管理局
木曾森林ふれあい推進センター
〒397-0001 長野県木曾郡木曾町福島1250-7
TEL:0264(22)2122 FAX:0264(21)3151
E-mail:kiso-fureai@rinya.maff.go.jp

森林ボランティア・NPO連携推進会議

10月2日（金）～3日（土）の2日間、諏訪郡下諏訪町において「森林ボランティア・NPO連携推進会議」を開催しました。



説明を聞く参加者

この会議は、中部森林管理局管内で活動する森林ボランティア団体や、NPO法人との交流促進及び情報交換や相互研鑽を行うことで、ボランティア団体等の更なる資質の向上を図るとともに、広く一般市民の方々に対し国民参加の森林づくりへの理解や、森林環境教育の重要性をPRすることを目的に開催したもので、11団体と局署職員併せて52名が参加しました。

1日目は、参加団体の見識を広げるため「御柱祭」についての講習会を行いました。

伐採された御柱が置いてある南信森林管理署管内の東俣国有林において、南信森林管理署職員から御柱と国有林の関係についての説明、下諏訪町議会議員の宮坂徹氏による御柱祭の歴史等についての説明に参加者は聞き入っていました。

その後、2日目の会場となる、あすなろ公園に移動し、「木工細工」「竹とんぼ作り」「ひのき箸作り」について、一般来場者に対し誰もが対応できるように講習会を行いました。



伐採された御柱



竹とんぼ作り

2日目は、今年で11回目となった恒例の「森・ふれあいフェスタ」を開催しました。

爽やかな秋晴れの下、大勢の親子連れ等が訪れ、今年初めて実施した木製のパーツを組み立てるミニイス作りや、土からできた不思議な絵の具を使ったドブアート、その他丸太切りやバームクーヘン作りなど、様々な体験を楽しみました。

また、下諏訪町のゆるキャラ「やしまる」と「万治くん」の登場で会場はさらに盛り上がり、

延べ700名の参加者に木や自然素材の数々と触れ合ってもらえる機会をつくることができました。

参加した各署（所）の職員も、様々なスキルを持った団体の技術と接する機会となり、2日間をとおして充実した連携・交流の場となりました。



丸太切り

地域と木曾川下流住民

「木曾郡植樹祭」 「木祖村・日進市合同育樹祭」

木曾郡植樹祭及び木祖村と愛知県日進市の合同育樹祭(木曾森林管理署、木曾森林ふれあい推進センター後援)が木祖村やぶはら高原こだまの森、奥木曾湖畔の「平成日進市の森林」(小木曾国有林)で紅葉が見頃の中10月17日(土)に行われました。

午前に行われた木曾郡植樹祭では、地元住民、地域関係者をはじめ、林業関係者、日進市をはじめとする下流域住民(5自治体関係者)ら約430人が参加し、ヤマザクラ、ヤマモミジ等の植樹を行ったほか、ひのき



植樹をする参加者

林での雪起こし作業、遊歩道へのウッドチップ敷等こだまの森の整備に汗を流しました。

午後は、両市村の職員や中学生、一般参加者ら約160名が平成日進の森林において育樹作業が行われ、10班に分かれて除伐やつる切り等の作業が行われました。

水源の森を守り、上下流域に住む人が交流する催しで今回で23回目となり、当センターからは木祖村からの依頼で、式典出席、作業指導、ヘルメット、手ノコの貸し出しを行いました。



除伐作業をする中学生

「木曾悠久の森」講演会

大桑村の阿寺溪谷をはじめとして周辺の国有林が、世界的にも非常に貴重な温帯性針葉樹の保存と復元を目指した「木曾悠久の森」に指定されたことを機会として、阿寺溪谷管理運営協議会では、木曾悠久の森について学び、阿寺溪谷の魅力への理解をさらに深めるために、木曾悠久の森の管理委員でもある大住克博鳥取大学教授が「木曾ヒノキ林ーその自然としての価値」また、当センター所長が「木曾悠久の森の取組」と題して講演を行いました。(共催：大桑村、木曾森林管理署南木曾支署)

11月14日(土)大桑村野尻地区館で開催され、村内外から約80名が熱心に聴講されました。

大住克博鳥取大学教授は、木曾ヒノキ林の歴史や特徴を挙げ、「資源としての価値だけでなく、世界でここしかない生物多様性を持っている」等解説をされました。



講演会の様子

※ 木曽地方の温帯性針葉樹の保存復元に向けた取組

取組の目的

天然のヒノキ、サワラ等を交える木曽地方の森林は、良質の木材産地として古くから歴史的建造物の維持や地場産業の継承・振興に大きな役割を果たしてきました。一方で、温帯性針葉樹がまとまって自然度の高い状態を構成している木曽地方の針葉樹林は現在では世界的にも非常に貴重なものとなっています。

このような歴史と木曽地方の温帯性針葉樹林の保存と復元を図る取組を通じて、先人たちが守り育ててきた森林からもたらされる、さまざまな恩恵を将来にわたって維持できるようにすることを目的としています。

これまでの取組経過

平成24年度

- 世界的にも貴重といわれる木曽地方の温帯性針葉樹林について、中部局として保存・復元を図る取組を開始すること決定

平成25年度

- 検討委員会を設置(有識者や地元自治体等)
- 報告書(取組区域の設定、取組の方向性)
- 局長通知(現行の保護林制度の範疇に納まりきらない)

平成26年度

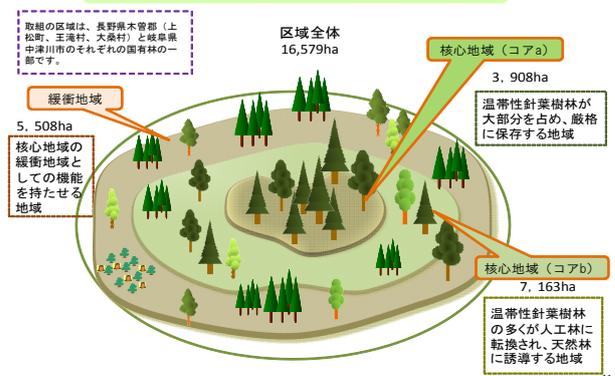
- 管理委員会を設置し、具体的な取組の検討を開始
- 取組地域の愛称を公募(7月)
- 愛称「木曽悠久の森」に決定(10月)

これまでの取組経過(今年度)

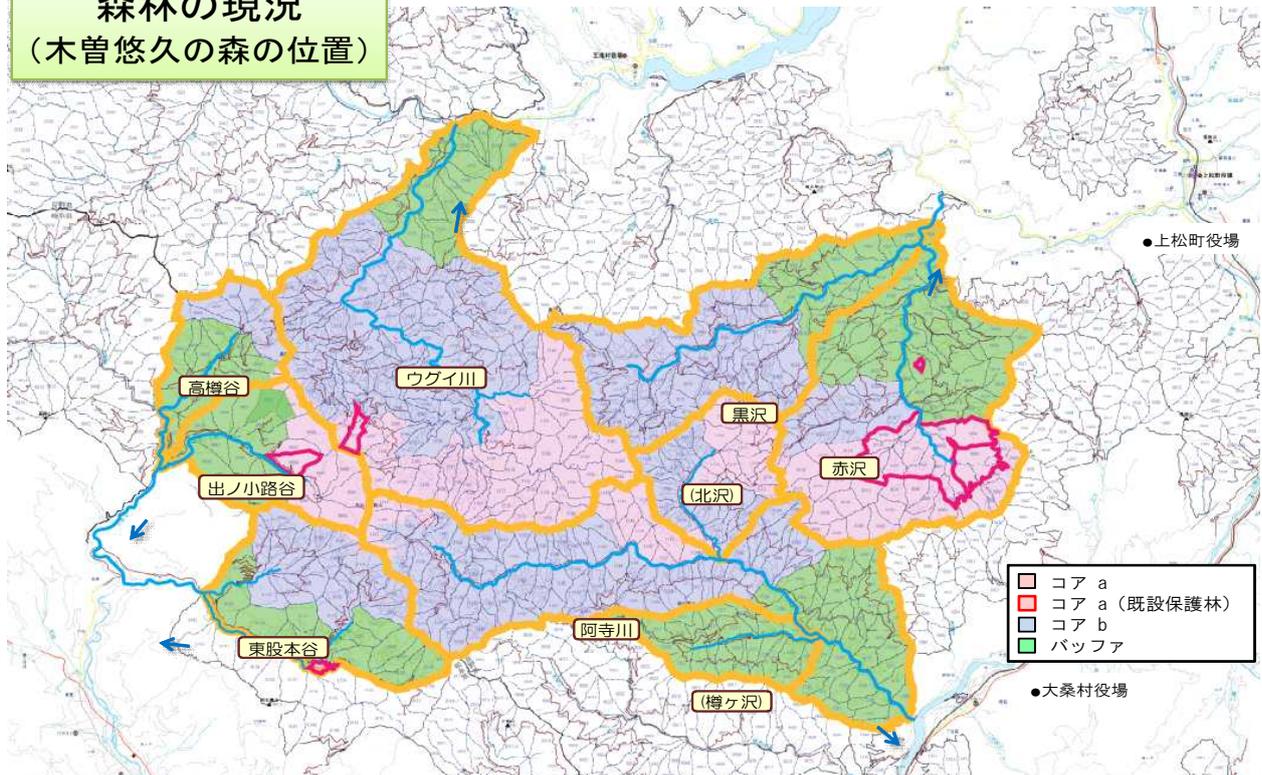
平成27年度

- 現地見学会及びワークショップの開催(大学、研究機関)
- 写真コンテストを実施
- 試験、研究データの集積
- 森林の取扱い等を定めた管理基本計画―取組方針(案)―を作成
- 新たな保護林を設定し、正式決定の予定

「木曽悠久の森」のゾーニングのイメージ



森林の現況
(木曽悠久の森の位置)



目指すべき将来像

元々の森林生態系としての生物群集を目指したいが、その姿がはっきりしないことから、数百年後には直径が1mを超える天然ヒノキの大径木を主体とし、これに他の温帯性針葉樹が広葉樹と混交している森林、又は地形等によっては部分的に多様な温帯性針葉樹が大層を占める森林に復元することを目指すこととする。



目指すべき将来像に向けて、これまでの試験・研究の整理・分析、新たな試験やモニタリング調査の結果等により、復元を目指していく。

27

取り組むべき課題

1. 人工林の天然林化に関すること
2. 木曾ヒノキの天然下種更新に関すること
3. 人工林の長伐期施業に関すること
4. 超長期のモニタリングと森林の取扱い方法の評価、改善
5. 特殊用材の需要・要望があった場合の対応
6. 属地的に検討を要する箇所の取扱い方法
7. 未立木地の取扱い方法

28

木曾悠久の森を活用した取組(イメージ)

地域協議会(仮称)

ボランティア団体、NPO、守る会等
遊歩道整備、現地見学会、森林体験学習会、ガイド等

提案 / 活動支援、レク森の活用、フィールドの提供等

管理委員会 — 森林管理(支)署
(森林利用・地域振興部会) ふれあい推進センター

南木曾支署

阿寺国有林1121林班(北沢峠付近)

300年前後の天然ヒノキを
主体とした森林
(核心地域コアa)



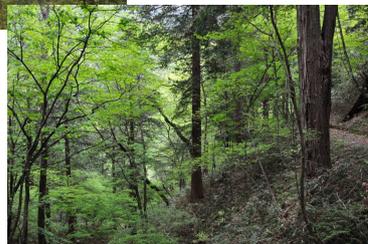
32



東濃森林管理署

300年前後の天然ヒノキを主体
とした森林(核心地域コアa)

300年前後の天然ヒノキ等の
温帯性針葉樹と広葉樹が混交
する森林(核心地域コアa)



40



木曾森林管理署(小川入国有林81林班)

300年前後の天然ヒノキを主体とした森林
(核心地域コアa)
既存保護林モニタリング調査箇所

伊勢神宮御杉始祭伐採跡地(H17)
広葉樹を主体に天然更新が進んでいる
(核心地域コアa)



41

木曽の国有林見学会（秋季）

木曽森林管理署管内の赤沢自然休養林で、木曽川下流域の住民を対象とした「木曽の国有林見学会（秋季）」を11月5日（木）に開催しました。

この催しは、江戸時代から現在まで深い繋がりをもつ木曽地域と名古屋の関係や、森林・林業について理解を深めてもらうことを目的に、下流域の都市住民の方々に、木曽川源流の国有林を訪ねてもらい、木曽地域の林業の歩み、木材輸送方法（伐採地、小谷狩り、森林鉄道、林業遺産）及び名古屋の熱田白鳥貯木場にたどり着くまでの運材技術の変遷や木材の生地を実際に見聞きしていただく学習講座で、春に続き今年度2回目となります。

当日は名古屋市民を中心に40名の受講者と、ガイド等を行う国有林職員7名により実施しました。



説明を聞く参加者



林内散策

渡停車場」に移動し、職員のガイドにより、歴史とともに育まれてきた樹齢約三百年余りの木曽ヒノキやサワラが生い茂る林内を散策し、木曽の林業の歴史や運材方法、伊勢神宮との関わり、木曽五木の樹種の見分け方や特徴などを学びました。

参加者からは「チップの道が歩きやすく足が喜んでます」「楽しかった」「また来てみたい」との感想が寄せられました。

なお、この催しは木曽復興支援の取組として位置づけており、チャリティーとして参加費用の中に地元の特産品等の購入代（お土産）が含まれています。

この講座に先駆け、10月22日（木）に、当見学会の予備知識を深めるために「熱田白鳥の歴史館」において、歴史と木材の利用をテーマとした展示の見学や事前学集会を行いました。

また、当日のバスの中では、織田信長が安土城を築城した物語を映画化した「火天の城」が上映され、木曽への想いを膨らませながら木曽ヒノキの生地へと遡っていきました。

赤沢自然休養林には11時頃到着し、紅葉の時期には少し遅れたものの、秋空の暖かな日差しの中で昼食をとり、森林鉄道で森林と溪流が織り成す景色を眺めながら終点「丸山



参加者全員で

城山史跡の森

長野県木曾町福島の市街地に隣接する「城山史跡の森」は、市街地北西に位置する児野山（1,281m）山頂から東に広がる背景林で、木曾ヒノキ、天然サワラ、ブナ、ケヤキなどの天然木が多く生育し、また、貴重な植物の自生地となっています。

森の中は遊歩道が整備され、戦国時代末期の典型的な山城城址跡や木曾義仲が平家追討の挙兵の際に名付けられたといわれる権現滝などの景勝地が点在するほか、木曾川沿いの町並みや遠くは中央アルプスの眺望などが楽しめることから、森林散策やハイキング等で多くの方が訪れています。

城山史跡の森では、地域住民のみなさんが中心となって「城山史跡の森倶楽部」が編成され、木曾森林管理署との多様な活動の森に関する協定のもと、森林環境教育等の活動拠点として日々取り組まれており、当センターでも地元のボランティア団体等への支援・連携を活用した保全活動等を行っています。

10～11月に行われた城山史跡の森での活動状況について紹介します。

秋の植物観察会



講師の説明を聞く参加者

城山史跡の森倶楽部主催（当センター共催）の植物観察会が10月25日に行われ、地元住民10人の参加者は、秋晴れの紅葉が眩しい中の森林で植物観察を楽しみました。

当観察会は、毎年、春と秋に木曾町福島の「城山史跡の森」（福島城跡一帯の国有林、県有林、寺社有林を総称）で行われているもので、当日は、植物に詳しい県植物研究会員の講師の案内で約8キロを散策しました。

参加者は、枝葉の煎汁を眼病の治療に用いたメギ（目木）、種子を数珠に使用するモクゲンジ、果実や枝から油をとって灯油として使用したアブラチャン、ほのかな甘い香りを漂わせるカツラなど秋の50種程の草本の特徴や城山史跡の森の歴史を熱心に学びました。

せるカツラなど秋の50種程の草本の特徴や城山史跡の森の歴史を熱心に学びました。

小鳥の巣箱掛け

の巣箱掛け作業を行い、城山史跡の森倶楽部の13名が参加され、当センターからは2名が作業に協力しました。

小鳥の巣箱掛けは平成21年度から毎年実施しており、森林に多く棲むシジュウカラなどの小型鳥類を対象に巣箱を製作しています。

昨年に設置して古くなった巣箱27箱を取り外し、地元の方が丹念に作られた新しい巣箱37箱を設置しましたが、取り外した巣箱には営巣や利用の形跡があり、来年の繁殖期にこの森で多くの小鳥たちに巣箱を利用してもらえるよう、掛ける場所や高さ、日向きなどを考慮して作業を行いました。



巣箱掛け作業

希少植物の保護・増殖

城山史跡の森には、長野県指定希少野生動植物であるササユリ、カザグルマ等の植物が自生しており、当センターでは城山史跡の森倶楽部と連携しながら貴重な植物の保護等に取り組んでいます。

ササユリは山地の草原や明るい森林に生育する多年草で、葉がササに似ていることに由来し、6～7月頃に茎の先端から漏斗形で淡紅色の花が咲きます。

ササユリの生育地では11月7日に小鳥の巣箱掛けの作業に引き続いて、林床の掻き起こしとともに播種作業を行いました。

また、カザグルマは、つる性の低木で林縁部の日当たりのいい場所を好み、5月下旬から6月上旬に白や淡紫色の大きめで可憐な花を多数付けます。

11月25日のカザグルマ自生地での整備は、城山史跡の森倶楽部の皆さんとともに、繁茂するクズの除去と、クズの根株に薬剤処理を行いました。



カザグルマ自生地の整備



ササユリの播種

コウヤマキ後継樹の育成

木曾五木の一つに数えられているコウヤマキは日本固有の常緑針葉樹で、一科一属一種の極めて特異な樹種ですが、木曾谷地域ではコウヤマキの生育箇所は限られ、天然木ともなると目にする機会があまり多くありません。

こうしたことから「城山史跡の森」の生育地では、天然稚樹育成を目的に平成21、22年にかけてリョウブ等の下層木除伐による林床の光環境の改善を図り、稚樹の発芽・生育状況について継続調査を行ってきています。

11月19日に実施したプロット調査では、5プロット中2プロットで新たな発芽が確認されるなど、ヘクタールあたりの本数は68千本となり、平成21年度調査開始時点の38千本から約1.8倍となりました。

また、稚樹の年生長は1～7cmと小幅ながらもすくすくと生育しており、下層木の処理を行ったことにより発芽等が促進されたものと考えています。



コウヤマキの稚樹

木曾駒ヶ岳植生復元ボランティア作業

中央アルプス木曾駒ヶ岳（標高2,956m）の頂上周辺では、登山者の踏み荒らしや、大量の降雨、降雪、強風による砂礫の移動等により貴重な高山植物の衰退が懸念されています。

当センターでは関係機関・団体等と連携して植生の衰退防止と復元を図ることを目的に平成17年度から植生マットの敷設作業を行ってきており、昨年度まで延べ1,967㎡を実行してきました。

植生マットの敷設、高山植物保護の看板を設置したこと等により、登山者による踏み荒らしの回避、表土の流出防止、砂礫の移動を最小限に抑える等の効果があり、木曾駒ヶ岳の植生が徐々にではありますが着実に復元してきています。

今年度もボランティア及び関係者により、過去に敷設してマットの劣化が著しい箇所での補修（敷き直し）を主体に150㎡の作業を計画しましたが、台風等による天候不順から9月の作業は2度にわたって中止となり、また、最終の10月13日には降雪と凍結による敷設作業が不可能となったことから、稜線にある管理小屋までの資材運搬を参加者24名で行うにとどまりました。あいにくの空模様と足元が悪い中でのマット等の運搬作業でしたが、事故に遭うことなく、参加されたボランティア等の方々のご協力により無事に資材を運び上げることができました。

今年度の事業は残念ながら断念することになりましたが、来年度以降も高山帯における植生復元事業に取り組んでいきたいと考えています。



悪天候の中での資材運搬

国有林野事業業務研究発表会

平成27年度の国有林野事業業務研究発表会が、12月10日林野庁で開催され、当センターからは「森林保全部門」において「木曾駒ヶ岳における植生復元作業について」と題し東京コンサルティング株式会社と当センターとの共同で発表しました。

平成17年度から始まったこの復元作業は、平成26年度で10年となり、一つの節目ということで、この10年間における、ボランティアによる植生復元作業の実施方法や実行結果、モニタリング調査の結果分かった植生回復の状況や解析内容等について、報告を行いました。



千畳敷カール